

2023年3月12日 受難節第3主日礼拝

メッセージ「岩を打つ。水が出る。」

岡嶋千宙伝道師

聖書 出エジプト記 17章 1-7節

今、教会で迎えている「受難節」。人となった神であるイエスが、人間の肉体をもってこの世に生き、それにより受けた苦しみ、特に十字架にかけられるまでの40日間の苦難に思いを馳せる時期。生きる苦しみ。それらが全くないという人は、それこそ、全くないと思います。わたしにも、もちろん。しょっちゅうあります。この教会で始めて語ったのが2020年の4月で、それからすでに3年近く経ちますが、この間にも、苦しさの中にあって、メッセージ担当の日曜日に、久宝寺駅から教会までの道を、晴れない気持ちと沈んだ思いに襲われながら、重い足取りで歩いてきたこともありました。だけど、不思議なことに、教会に到着して、礼拝堂に集う皆さんの顔を見て、声を聞いて、言葉を交わし、また、オンラインで繋がっている皆さんに思いを寄せ、一人ひとりの存在を感じて、礼拝を守っていくうちに、癒されていくのです。苦しみが軽くなっていくのです。皆さんとの交わりが、わたしにとって、とても貴重なもので、大切な時を過ごさせてもらっていると実感しています。先月は、父親と共に礼拝を守らせていただいたのですが、わたし自身、個人的にとっても苦しい状況にあって、父に助けられている最中でした。その折に、皆さんと礼拝を守り、礼拝後には一緒に釜ヶ崎に届けるためのおにぎりを作る時間を持てたことで、大いに慰められ、癒されました。お一人おひとりに感謝です。苦しいなかで与えられる慰め。なかなか見いだすことができません。本日の御言葉、今から約3600年前、アフリカ北東部の砂漠で苦しみの内にいた人たちと、彼らの信じる神様とのやりとりが描かれた箇所です。イエスの苦しみを覚える受難節。この御言葉をもとに、苦しみのなかを歩むときにどうすれば慰めを見いだすことができるのか、神様が与えてくれるメッセージを共に探してみたいと思います。

「水がない!」2023年の日本に生きるわたしたちにとって、水はあたりまえです。蛇口をひねれば水が出ます。コンビニやスーパーに行けば、ペットボトルに入った水を買うことができます。飲み水も、料理／掃除／洗濯で使う水も、身体を洗う水も、特別な苦勞をせずに、手に入れることができます。ですが、時と場所が変われば、当たり前ではありません。水は、容易に入手できる資源ではないのです。今後の気候変動の影響によっては、これから起こる戦争の原因が、水源をめぐる争いとなるだろう、とも言われています。本日の箇所の舞台となっている地域、アフリカと中東を結ぶシナイ半島は、そのほとんどが山で占められています。山と山の間に平地があることもあるのですが、大半が砂漠。ごく一部、例えば、半島の南に位置する都市、昨年、気候変動に関する国際会議が行われたシャルム・エル・シャイクなどでは、水道整備がなされていますが、それ以外の多くの地域では、水を確保することは容易ではありません。水なしで、人はどのくらい生きられるのか。皆さん、ご存じでしょうか。極端に寒くも、暑くもなく、湿気もちょうど良い、という気候

のもとでは 100 時間。約 4 日間、人は水なしで生きられるそうです。当然、条件が変わればもっと短くなります。シナイ半島の 5 月から 6 月の平均気温は 27～32℃で、平均最高気温は 35～40℃。日照時間は一年でこの時期が一番長く、逆に雨の量は一年で一番少ない。一日の平均降水量は 0ml～0.38ml。ほとんど雨が降らない。昼間は太陽が降り注ぎ、かんかん照りで乾ききっています。聖書によると、エジプトを脱出してきたイスラエルの人々は、女性と子どもを除いて、成人男性だけで 60 万人。それだけ多くの人たちが、宿営のためのテントや、服や食器などの生活用品を持ちながら、家畜も一緒にエジプトからシナイ半島へ移動し、逃げ延びた先の砂漠で暮らしているのです。もともと水がないところにこれだけの人たちが押し寄せたのなら、水が枯渇するのは当然。この状況下では、7 時間おきに水分補給をしなければ、命の危機にいたる、とする研究もあります。現代の日本の感覚で、本日の箇所を読んだのなら、「水がないからといって、指導者であるモーセや、そのモーセをたてた神に不平をのべるなんてけしからん!」と思うかもしれません。信仰がたりない、もっと強く固い信仰を持つべきだ、と。ですが、同じ状況にあったら、おそらく、いや、確実に、わたしも不平をぶつけます。自分の命に関わるだけではなく、自分の家族、隣にいる子どもまで、渴きて死にかけているのですから。17 章 4 節。不平を述べる人々の様子を神に語る中で、モーセは次のように言います。「彼ら(イスラエルの人々)は今にもわたしを石で打ち殺そうとしている」。一瞬、「なんてひどいんだ!」と思ひもしますが、そう言いたくなるのもわからないでもありません。水がないというのはこれが初めてではありませんでした。モーセに率いられてエジプトを脱出したあと、これまでも、水がない(15:22-27)、食べ物がない(16 章)ということがあり、同じことがまた繰り返されたのです。「もういい加減にして!あなたの言うことなんか聞きたくない!これ以上信じられない。わたしたちを殺そうとするなら、わたしたちがあなたを殺してやりたい!」そう思う気持ち、沸き上がってもおかしくないと思います。それほど逼迫した状況に、人々はおかれていたのです。

そんな人々のために、神が提示した解決策とは、もちろん、水をもたらすことでした。人々の乾きを癒し、命を繋ぎ止める水。この場面だけをみれば、それは飲み水です。ですが、出エジプト記全体を踏まえると、この水には、より深く広い意味が込められていることが分かります。出エジプト記には、水が溢れています。本日の箇所に至るまででも、1 章、2 章、4 章、7 章、8 章、9 章、10 章、14 章、そして 15 章に、水が登場します。大概がナイル川の水ですが、その他にも、ミディアン地方の井戸の水、ナイル川から派生する水路の水、湖の水、エジプトから少し離れた葦の海の水、さらには、水溜まりの水まで。水の姿も様々です。時に、川や水路の「流れ」として。時に、池や水溜まりの「留まる水」として。あるいは、空から降る雨や雹として。様々に姿を変えて水が登場します。また、その変幻自在の水が、人に何をもたらすのか、ということについても、様々に描かれています。水は、人を癒やし、清めます。救いをもたらします。人と人とを出会わせます。人をかくまいます。休

息を与えます。このように好ましいものであるかと思えば、全く逆の性格を見せることもあります。人の生活にとって必要なものを破壊することがあったり、人に害を与える蛙や血を産み出すことがあったり。さらには、人を死に至らせることさえあるのです。このように描写される水は、とらえどころがなく、ひとつに固定できるものではありません。姿を変え、場所を変え、人の日常に深くかかわり、良い意味でも悪い意味でも、あらゆる場面に様々な形態と有り様で、人にかかわり続ける水。多様で、動きに満ち、様々な姿を変え、人々の日常において、様々な仕方で影響を及ぼす物質。あるいは「存在」といった方が良いかも知れません。その水に、この場面で新しい側面が加えられます。「岩から出る水」。シナイ半島の岩は、わたしたちが普段目にするものとは違って、巨大なものです。人の何倍もの高さの岩がいたるところで乱立している風景を思い浮かべてみてください。その岩たちは、何日もの間、太陽に照らされ乾ききっています。そこから水が出てくるなんて誰が想像できるでしょう。動きに満ち、流れがあり、いたるところに移動し、人の日常に入り込み、様々なあり方で人とかかわる水。それとは、正反対の岩。固くて動かず、一つのところにじっとして、人に及ぼす影響も限られている岩。そこから水が出てくる。「もしかしたらできるかも」と思い、数日前、家の庭の比較的大きい石、前日の雨に濡れて湿っていたその石を、木の枝でたたいてみました。すると、♪なんということでしょう～♪水は出てきませんでした。枝が悪かったのか。石が悪かったのか。それとも、わたしの信仰が足りなかったのか。この場面における神のメッセージとしてまず思い付くのは、「岩から水が出るという、あり得ない奇跡が起こった。だから、どんなに苦難の時であっても、神の救いを信じよう」というものでしょう。確かに、全知全能の神、この世のすべてを創られた創造主ならば、岩から水をということも、お茶の子さいさいなのでしょう。でも、人間の理解を越えた奇跡的な神の業、という理解だけでこの場面をとらえるなら、神のメッセージの半分以上を見落としていることになるように思えるのです。

神様が「とても良い」と言った世界の中で、その世界に生きる一つの存在であるわたしたち一人ひとりが、このとても良い世界のただ中に、すでに備えられている、神様の奇跡に気づいていく。本日の場面を含め、出エジプトに描かれた水。様々な姿を変え、流れの中にあり、動きに満ち、時に人を癒して生かし、また逆に時に人を死に至らしめる水。それは、一つのことから、一つのもの、一つの出来事が、わたしたちの見る特定のありかたに留まるものではない、ということを示しているとも考えられます。見方を、接し方を変えれば、あらゆるものが、別のものになっていきます。良きものにも、悪きものにもなります。そして、見方を変え、接し方を変えることによって、「もう駄目だ、絶望的だ、これ以上進めない」と思っていた状況に、解決の糸口が見えてくることもあります。だから、一つの考え、一つの思い、一つの思考パターンにとらわれず、心を開き、魂を開き、時と場所、あるいは状況によって姿を変える水のように、柔らかかにしなやかに世界と向き合っていけば良いのです。再び聖書の記述。水が、杖で打たれた岩から出てきた。水と杖と岩。ほとんど共通点

のない 3 つのものが、モーセという一人の人間の介在を通して、あるいはその背後にいる神の存在を通じて、人々に癒しをもたらす状況を創り出していった。ここには、人間の当たり前や当然、常識ではありえないとされるどころ、人が普段は目を向けようとしないうところにこそ、人々に癒しや救いを与える神の業がなされている、なされ続けている、というメッセージが込められているように感じられます。わたしたちが目を向けてこなかった、関心を持たなかった、ありえないと思っていたところ。そこに神の奇跡は起こり続けている。苦しみのただ中であって、自分しか見えなくなって、誰の声も聞こえなくなって、これ以上生きることができなくなって、でも、それでも、実は、見えなく、聞こえなく、気づけなくなっている、普段の光景の中に、日常の何気ないヒトコマに、救いの奇跡は、今も、もたらされ続けている。そのことに気づいてほしい。これが、神様がわたしたちに伝えるメッセージなのではないでしょうか。

福音書、とくにヨハネ福音書のイエスは、水と共にあります。婚礼の場で水をぶどう酒に変え(ヨハネ福音書 2 章)、サマリアの町にある井戸のそばで外国の女性と語り合い(同 4 章)、エルサレムの池の傍らで病気の人を癒し(同 5 章)、ガリラヤの湖の上を歩いて弟子たちを驚かせ(同 6 章)、生まれつき目の見えない人に「シロアムの池にいったら洗いなさい」と伝え視力を回復させたイエス(同 9 章)。水とともにあるその人イエスは、自身が「生きた水」(同 4:10)であり、自分を受け入れ信じた人の内には「生きた水が川となって流れる」(同 7:38)と語ります。生きた水として、人と出会い、出会った一人ひとりの見方、見る方向を広げていったイエス。そのイエスを受け入れ、生きた水に満たされた人たちは、他者との関わり、関係性を豊かに新しくする流れの中に生かされていきます。滞りかけていた隣人との関係が動きだし、壊れかけていた関係が修繕されていくのです。わたしもその一人。もちろん、イエスに与えられたその歩みをいつでも完全にできている、とは言いません。ですが、生きた水であるイエスを知り、その流れによって築かれる関係に生きるなかで、神の救いの一輪を感じてきたことも事実です。この教会での皆さんとの交わりを通して癒されている、というのもそのひとつ。興味深いことに、本日の箇所において、モーセが杖で岩を叩き、その岩から水が出てきたあと、人々が実際にその水を飲んだ、とは記されていません。もちろん、飲んだ後、どんな反応を示したかについても無言です。この欠落、聖書の無言は、けれども、何も伝えないからこそ、わたしたちに強く語りかけているように感じられます。あなたは、その水を飲みますか？ 滞った関係に動きを与え、流れに満ちた関係を創り続ける水。生きた水であるイエスを、あなたは受け入れますか？ そして、その水、イエスを受け入れたあと、あなたはどう生きていますか？ どう生きていきますか？ 今日から始まる一週間、皆様と共に、今与えられている一つ一つの関係、神と「わたし」、イエスと「わたし」、隣人と「わたし」の関係をもう一度、新しい視点で、見直し、向き合っていきたいと思えます。向き合った先に、すでに与えられている神の慰めと癒やし、そして救いを見つけることができると信じて。